

令和4年度附属学校教育局プロジェクト研究報告書

〔プロジェクト名〕 プロジェクト研究2：盲ろう幼児児童生徒の指導・支援に関する研究
〔担当者〕 星祐子、雷坂浩之
〔令和4年度の取組状況〕 【構成】 雷坂浩之（附属学校教育局）、星祐子 三浦佳菜江 高橋里子 石谷璃穂 佐々木望美 塚田直也 亀井笑 佐藤直子 小林寛美 飯島美帆 加藤真弓（附属視覚特別支援学校） 山縣旭日 田中優子（附属聴覚特別支援学校）、佐藤知洋（附属大塚特別支援学校） 岡本義治 金子栄生（附属桐が丘特別支援学校） 【研究の趣旨と目的、研究の経過】 視覚と聴覚の両方に障害のある盲ろうの子どもたちは、視覚障害と聴覚障害の状態、視覚と聴覚以外の障害の有無、コミュニケーション手段等、一人ひとりの状態像は多様であるが、情報入手に多大な支障をきたし、コミュニケーション獲得と概念の理解に多くの困難性と時間を要することは共通している。そして、盲ろう幼児児童生徒を担当する教員は、視覚障害と聴覚障害の的確な把握、発達段階の把握、適切なコミュニケーション手段等で困難さを抱えていることが明らかになっている（国立特別支援教育総合研究所, 2017）。 そこで、筑波大学附属特別支援学校5校の有する専門性、知見の提供と実践的検討によって、附属特別支援学校に在籍する盲ろう幼児児童生徒の指導に関する実践を積み上げていくこと、その教育実践を各種研究協議会や研修会及び筑波大学特別支援教育教材・指導法データベース等で発信することによって、全国の視覚、聴覚、知的、肢体不自由、病弱、知肢併設等、様々な障害種の特別支援学校に在籍しておる盲ろう幼児児童生徒を担当している教職員の参考になるのではないかと考えている。 盲ろう幼児児童生徒の85%以上が視覚障害及び聴覚障害の他に、知的障害や肢体不自由などの障害を併せ有していることから、筑波大学附属特別支援学校5校の有する障害種別の知見を統合することで、視覚障害及び聴覚障害の他にも障害を併せ有する盲ろう幼児児童生徒の指導に必要な実態把握、配慮事項を明らかにしていくことが可能となり、特別支援学校群としての新たな価値の創出につながると考えている。 1年目となる令和3年度の事例検討においては、主に以下の点を確認した。 ・視覚や聴覚の活用について測定ができない、あるいは活用がかなり難しいと指摘されてきた幼児や児童が日々の生活や教育活動の中での視覚や聴覚への働きかけによって、見ること、聞くことを意識し、活用が徐々に図れてきているなど、障害の状態把握について固定的に考えることなく、活用の可能性を考えていくことが示された。

- ・聴覚が活用できるということは言葉を理解できるということではない、何がわかっているのかをきちんと把握したうえで、働きかけをしていくことが大切である。
- ・子ども自身の伝えたい、聞いて欲しいという気持ちを育むことがコミュニケーションの土台になっていく。
- ・偶発的な学習ができない中で、体験を積み上げていくことによって概念形成を図っていくことになる。高い学習能力を有している子どもであっても欠落してしまうことを踏まえた指導が必要である。今年度は、プロジェクト研究の２年目となる。

【令和４年度の研究内容】

- 研究に係る各校の状況について情報交換
- 盲ろう幼児児童生徒の事例検討会（オンライン）
 - ・ ２事例（小学部児童 A 小学部児童 B）について
 - ・ 研究協議内容
視覚や聴覚の活用について、児童への関わり方、本人からの発信とその解釈
曜日の提示と理解、文字指導について、個と集団の指導について 等
- プロジェクトチームメンバーによる附属視覚特別支援学校の授業見学
- 研究会・研究協議会での報告等
 - ・ 全国盲ろう教育研究会第 20 回研究協議会での事例報告
 - ・ 附属視覚特別支援学校第 19 回視覚障害教育研究協議会における事例報告

【令和 3・4 年度の研究成果と今後の展望】

- ・各障害種の有している知見や幼児児童生徒との関わりの経験を出し合うことで、対象とした盲ろう幼児児童生徒を様々な角度からとらえ、検討することによって、教育活動に生かすことができた。学部や障害種を越えたつながりの中で、学び合い、子どもの成長を共有し、喜び合うことができた。
- ・対象とした盲ろう幼児児童の教育実践を文科省委託事業や全国盲ろう教育研究会において広く報告した。今後も様々な機会を通して教育実践を発信し、実践の交流を行うとともに、現職教員研修の場として、附属学校を活用いただきたい。
- ・筑波大学特別支援教育教材・指導法データベースの「盲ろう」のカテゴリーに指導に係る教材を発信した。今後、掲載事例を増やしていきたい。
- ・令和 5 年度以降も本プロジェクト研究の成果と課題を踏まえ、プロジェクト研究（重複障害教育、盲ろう教育に係るテーマ）の継続を検討したい。

令和4年度附属学校教育局プロジェクト研究報告書

〔プロジェクト名〕 プロジェクト研究3：コロナ禍におけるインクルーシブ教育の実践と評価
〔担当者〕 小島道生
〔令和4年度の取組状況〕 ・令和4年10月メール会議の実施 【構成】 附属学校教育局：小島道生 附属学校：氣仙有実子、熊澤彩子（附属視覚特別支援学校）、杉田葉子、菅野佳江、飯島徹、藤本美佳、菊池恵美、堀江俊丞、久野智宏、田上幸太、石飛了一、根岸由香（附属大塚特別支援学校）、向山勝郎（附属桐が丘特別支援学校） 【目的】 コロナ禍において、感染予防の観点から、教育機関では授業などにおいて、様々な新たな実践が取り組まれている。そして、交流及び共同学習においても、オンラインによる取り組みなどが示されつつある。 そこで、本研究では、コロナ禍におけるインクルーシブ教育の実践について検証し、より効果的な教育実践の在り方について検討することを目的とする。附属学校群と局での取り組みについて検証するとともに、国内外の研究者や学校機関とも連携をし、教育実践の状況や効果的な支援の在り方について検討する。 なお、本プロジェクトはコロナ禍における検討ということもあり、感染状況によって継続年数などは検討していく予定である。
〔令和4年度において得られた成果〕 本年度は、前年度に引き続き、メール会議にて、コロナ禍における交流及び共同学習の実践の評価について意見交換を行った。また、附属学校教育局が取り組んだ交流学习についても評価を試みた。
〔令和5年度に向けた課題〕 ・ コロナ禍における交流及び共同学習の効果的な実践の在り方について検討する。 ・ 令和5年度は最終年度として、これまでの交流及び共同学習の実践の成果についてまとめるとともに、学会発表及び学術論文として発表する。